今治歴史散歩

大　成　経　凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第26回は、しまなみ海道沿線に現存する明治期の灯台に光を当てながら、航路整備のダイナミズムを歴史散歩したいと思います。　※『燈光』７月号・９月号（2019年）の灯台研究生の論稿参照。

第26回　しまなみ灯台ヒストリー

●布刈瀬戸の航路整備と大下島灯台

今治市と尾道市を結ぶ高速道路〝しまなみ海道〟の架橋下には、布刈瀬戸（因島大橋）・船折瀬戸（伯方・大島大橋）・来島海峡（来島海峡大橋）という、芸予諸島海域を抜ける３つの主要航路があります。

この中で最初に整備されたのは布刈瀬戸（三原瀬戸）で、明治27（1904）年５月15日に９基の航路標識（８灯台・１灯標）が同時に初点灯しています。愛媛県域の灯台も２基あって、同航路東口の百貫島灯台（上島町）と西口の大下島灯台が含まれます。各灯台の形状が円形石造に対して、大下島灯台だけが異彩を放つ八角形石造でした。

１つの航路で９基同時の初点灯は珍しく、奇しくもその直後に日清戦争が勃発しています。ただ、設置背景には戦時の色彩よりも産業界の要請が強く感じられるのです。前年の明治26（1893）年11月、神戸とボンベイを結ぶわが国初の国際定期航路が開設されます。これは日本郵船（三菱系海運会社）とタタ商会（インド綿花商）が手がけたもので、インドからの積み荷は紡績業に欠かせない綿花でした。

関前地区の大下島灯台
※当初のフランス製灯光レンズは大下集会所に収蔵

インド綿による高品質の綿糸生産は、明治23（1890）年から盛んとなります。ただ、同航路は外国の海運会社に独占され、輸送費が割高でした。日本郵船は政府の補助金と大阪経済界の支援でこの航路開設に漕ぎつけ、その安全確保として布刈瀬戸の航路整備が急がれたと考えられます。これによって大阪の紡績業界は活気づき、日清戦争の頃に大阪は〝東洋のマンチェスター〟と称されるようになります。

●来島海峡の航路整備と大浜灯台

次に整備されたのは来島海峡の航路で、明治30年代に３基の航路標識が設置されます。この背景には、日清戦争後の海運振興策がありました。外航海運を担う大型鋼船などには航海奨励法・造船奨励法（明治29年公布）によって奨励金が交付され、海運各社の所有船舶が増えていったのです。

中渡島灯台が明治33（1900）年４月20日、大浜灯台とコノ瀬灯標はともに明治35（1902）年４月１日に初点灯しますが、大浜灯台の構造だけが違っていました。当時の瀬戸内海の灯台の多くは、高さ10㍍未満の小型の円形石造であるのに対して、なぜか大浜灯台は15㍍近くの高さを誇る鉄造六角形の大灯台だったのです。

明治期の灯台は、逓信省が産業振興や地域の要望などを勘案し、優先順位を設けて設置を進めていきました。来島海峡よりも、迂回路の布刈瀬戸が急がれた背景には、航路の安全性が考えられます。そのことは、明治30年代に

外国の艦船が夜間の来島海峡通峡を避け、小部湾で錨泊をとっていたことが物語っております。

中渡島灯台は、逓信省の明治27年設置計画に初めてその名が登場します。続いてコノ瀬浮標が、明治32年５月に「海軍大臣が逓信大臣にあてた設置要望書」に記され、その翌月の回答書に初めて大浜灯台が登場します。当初、海軍は大島最南端へ光達距離約17海里の３等回転灯台を要望しますが、逓信省はこの代わりに大浜(近見村湊)への４等回転灯台設置を提案します。４等へのレンズ格下げは、大灯台を丘陵に設置して高さを確保すれば、光達距離が増すため、海軍の要望に適合したのです。

竣工当時の大浜灯台（公益社団法人燈光会所蔵）
※囲い塀や石垣は当時のまま現存

●灯台設置と戦時体制

明治33年９月に大浜灯台が起工される中、布刈瀬戸の大久野島と来島海峡の小島では、ロシア艦隊の侵入に備えた芸予要塞の築造が始まっていました。周囲約３㎞小島には中部・南部・北部の３か所に砲台が整備され、北部砲台が最も遅い明治35年２月に竣工します。そこには最新の建築技術が用いられ、北部発電所の屋根は鉄筋コンクリート造の形状〝陸屋根〟でした。

開戦への備えから、灯台も完成が急がれますが、鉄骨造は工期短縮につながりました。そこで、鉄造灯台の建設で実績のある逓信省技手の岡正が、大浜灯台の現場監督を務めています。その大浜灯台も、昭和戦前の観光絵葉書に何度も採用されながら、昭和29（1954）年に廃止され、同38年に解体撤去となります。そばにあった吏員退息所は、コノ瀬灯標とともに昭和50年代に唐子浜へ移築保存されました。

小島にある北部砲台の発電所

観光絵葉書に紹介された大浜灯台

最後に整備されたのは船折瀬戸の航路です。太平洋戦争末期の昭和20（1945）年４月１日に鶏小島灯台・舟折岩灯標・六ツ瀬灯標の３基の航路標識が同時に初点灯しています。これらはすべて鉄筋コンクリート造で、大正期から芸予諸島海域でも同構造の航路標識が増えていきます。